

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成29年6月1日発行 一毎月一回二日発行
俳句雑誌 沖 第38巻第6号

俳句雑誌「おき」

沖

6月号

沖
発行所

印

泥

能村 研三

俳句と写真

他郷は知らず鷹化して鳩となる

デッサンの構図探りはうらけし

活字力衰ふままに亀鳴けり

ふらここの真顔同士の漕ぎくらべ

俳句と写真のコラボレーションが流行っているようだが、写真と俳句がつかず離れず、お互いの効果を引き出すことが面白い。

NHKテレビでも「フォト五七五」という番組があって、今ブームになっている。先日「沖」同人の林昭太郎さんが、

ひまはりは種に少女は母親に
という句で、この番組の年間優秀賞を受賞し、写真家の浅井慎平氏から激評を受けた。この番組は写真と俳句を組み合わせて一つの作品とする新感覚のアートで、写真と俳句の響き合いが生み出す不思議な世界を創出している。

俳句と写真は、極めて常識的な絵葉書のようなものになつては面白くも何ともない。

今、俳人有志とプロの写真家でテーマを決めて俳句を詠み、写真を撮る会を作った。まず最初に選んだのが、間もなくまちの再開発で無くなる「八幡横丁」という小さな横丁で

春興や黒松小路に迷ひゐて

春騒雨伝ひ走しりのくさり樋

印泥を篋で耕し春行けり

初夏のビル風を浴ぶ質屋蔵

竹植ゑて天気予報の大狂ひ

創刊の表紙絵涼し「夏に入る」

「俳句朝日」休刊に際し創刊号の表紙・東山魁夷の絵に思う

あった。二百メートルぐらいの短い距離ではあるが、そこには昭和を生きた生活そのものがある。毛糸屋さんに帽子屋さん傘屋さん、大型店に行けば全部揃ってしまうだろうが、それぞれ間口の狭い店ではむかし馴染みの客と店の主の会話が華が咲く。ひと月ぐらいの間に、写真家と俳人が次々にこの横丁に出没し、写真を撮ったり、吟行でいろいろ取材をしたので、地元の人たちは少なからず驚いたようだ。

帽子屋の間口は二間春惜しむ 研三
写真家には俳人だけでは考えられないような視点があり、俳人だけで行う吟行会とは違った面白さがあった。



能村 研三

登四郎忌

林 翔

八十四年前の記憶

阪神大震災のニュース、その痛まじさが胸を去らない内に、今度は、能登半島地震、日本はまったく地震国である。

風立ちぬ絮たんぽぽの完円に
鶯の鳴き止む間欲しとさへ思ふ
暁の気を掻き乱す尾や営巢期
急に空く電車へ春陽入り込みぬ

私が体験した大地震と言えば、今から八十四年前、大正十二年の関東大震災である。当時私は小学校四年生。夏休みも終わった九月一日は二学期の始業式の日だった。式を終えて帰り、やがて母と妹との三人で昼食を始めようとした時、いきなりの大揺れ、棚の上の物は皆、畳の上に着ち散らばった。狭い借家に六人家族で住んだから、戸棚に入りきらぬ物は棚を吊って積んで置いたのである。それらを掻き分けるようにして玄関から出ようとしたが、玄関の土間に取り込んであった張板三枚が反対側の壁に倒れて食い込み、びくとも動かない。母子三人はその下の斜めの空間から抜け出て、近くの空地（藤堂邸跡がやや広い空地になって

湘子忌を花散る頃と思ふのみ

人はいさ草が驚く春騒雨

蘭の花にとまる小粒の日の光

父の日や幾度受けし祝ひ花

ステッキと言つても杖よ風薫る

遺著に向き眠るのみや登四郎忌

曾ては墓参もせしが

いた)に逃げ込んだ。近所の人々も皆、そこに避難してきた。昼食時間(午前11時58分)であったのに、幸い、近所からの出火は無かった。

間もなく姉、続いて父が帰つて来て避難所に合流したが、池袋の成蹊学園に通学していた兄がなかなか帰つて来ないので、幼い私を除く三人は随分心配していた。しかしやがて兄も、十三歳の身で池袋から本郷まで徒歩で帰ってきた。

これで一安心と、私は団子坂上まで様子を見に行つた。坂下は地盤が弱かつたらしく、殆どの家が倒壊、坂を登つて来る避難民の真つ青な、いや真つ青以上に青い顔・顔・顔が、今も忘れられない。

林 翔



蒼茫集



多作多捨

水上陽三

初蝶と自問自答の声出づる
一本の桜に尽くる袋小路
山茶萼の剥がしたくなる幹の錆
いつ来ても惚の芽誰か掻きしあと
透かし見る紙の紋様春愁
桃摘花俳句は多作多捨よかり

あたたかし

辻

美奈子

鳥雲に入るおろおろと母である
寄居虫の出でて螺旋を巻き戻す
踏青のからだを運びゆく体
蛇衣を脱ぐ全長をもてあまし
子の髪に芯たしかなる朝桜
育ち来しやうに育ててあたたかし

石筍の丈

北川英子

伊吹嶺の勇姿もつひに笑ひけり
囀りに呼応の一羽籠の内
結界へ半歩踏み入れ花衣
ぼんぼりのコード巻きぬる余花ぐもり
窯の火を止めて落花の二夜かな
花過ぐや石筍の千年の丈

時の風

千田百里

梅は詩を禽は調べを運び来し
岩崎邸句
われも貴婦人春の露台に佇めば
列柱に時の風聴く虚子忌かな
花吹雪同齡の死に化粧して
一族を仕切りしことも花の山
独活待たせ油まろばすフライパン

彫目 秋葉雅治

虫出しの雷やするどき妻の勘
豪邸（豪邸）に明治の彫目あたたかし
花ふぶき浴ぶ栄冠も惜敗も
桜しべ降る銀輪に墨堤に
洛中に美酒洛外の遅ざくら
春惜しむ女坂男坂の緩急に

夕牡丹 渡辺昭

若竹の一幹を背に石羅漢
師の庭の実生の緑立ち挙り
菰藁の婆沙羅乱れに夕牡丹
鈴鴨の倒立の尾羽風さそひ
銀波見ゆ海へ七折れ落椿
鬱の日のまなぶた痒し蝮の道

旧岩崎邸庭園 安居正浩

どこを踏んでもたんぽぽの明るさに
花過ぎの三つ折れ階段より女
竹皮のためらひ脱ぎに午後の雨
虚子の忌のゆるやかな水たぎつ水
花筵対角線上の人に恋

方一里 辻直美

良寛とおなじ春日を子と遊ぶ
鳥帰るなかぞらなぞる象の鼻
逃水を追ひ暮しとは厄介な
祖父が来てまた入学の身拵へ
鳥交る受胎告知につばさあり
方一里花の盛りを見終はんぬ

生き急ぐ 小山田子鬼

生き急ぐ早さに噎せて蜆汁
人避けて歌ふ妻なり受難節
人見知り色の春蘭香り立つ
空に鳶置いて畑を打ち始む
全身をもて考へる春蚕かな

連絡網 楠原幹子

さくらさくら連絡網のゆきわたり
物音のみな遠ざかり夕桜
手廂のやがてうしろ手鳥雲に
亀鳴くや水位じわじわ高くなり
しやぼん玉はじけて嬰のくしやみほど

潮鳴集



光

大川ゆかり

初花や青きと聞きしこの星に
囀りに波の生みたる光かな
四月一日しづかに空気清浄器
饅頭に花の焼印春の風
くちびるに戻る弾力さくら時

海鳴り

中尾公彦

スポイトの吸ひ上ぐインク春灯
クリスタルの海の膨らむさくら東風
海市見てより胸中の海鳴りす
花冷の手吹ガラスにある気泡
麦畑浮力のつきて光りけり

追越車線

代田幸子

逃水や追越車線走りづめ
カンバスは丘の斜面よ芝桜
ふらここやはたりと動く象の耳
香草のにほふ指先夜の新樹
山脈の風にあつまる花林檎

パプリカ

栗原公子

春ひとりルーペに文字を太らせて
時間てふ降り積るもの朧月
打ち消して不安ふくらむ花吹雪
木洩れ日の真つ直ぐに降る竹の秋
パプリカの赤よ黄色よ春闌くる

沖作品



能村研三選

初蝶に山野浮き立つひかりかな

茨城

内山 花葉

さざ波に胎動きざす蝌蚪の紐

麦踏を見て来し足のほてりかな

寄木の床のかくれなき瑕花冷す

ミントンの絵タイルに春惜しみけり

役すでに了へて寂たり受験絵馬

神奈川

堀口 希望

セピア色の澤田美喜さんあたたかし

島裏の路地のいとなみ諸葛菜

観覧車に乗る春月に触れたくて

日時計のあはき影よむ暮春かな

春の闇つなぎ回送列車かな

夜のしだれ桜本性見るおもひ

春陰や明治を憶えてゐる鏡

たんぼぼの吹かれるまでの小宇宙

春愁ひ列車の窓のはめぐろし

東京

小嶋 洋子

ものの芽に雪が鍛へし力満つ

薄氷に落日の彩うごきけり

崖水柱もんどり打つて海に墜つ

たなごころまろめて掬ふ蝌蚪の水

畦塗りの一線空へ遠筑波

鍬の柄に楔打ち込む社日かな

大試験ペンのせせらぎあるごとし

花冷の轆轤に壺の立ち上がる

永き日の漬物石でありにけり

列柱の時のあはひに陽炎へる

春障子菱の形にひかり満つ

啓蟄や保守点検のブザー鳴る

春宵や朱肉の滲む認印

若草や瀬戸大橋に銀の雨

寄居虫や吾は東京の殻の中

薄明に懺悔のかたち紫木蓮

北海道

梶川智恵子

茨城

鮎川富美子

千葉

篠藤千佳子

東京

七種 年男

沖作品 15句選評

*
能村研三

初蝶に山野浮き立つひかりかな 内山 花葉

春先になつて最初に出会つた蝶を初蝶というが、小さくて力弱く群を作らずにただ一匹で舞う姿は、春の訪れを知らせてくれる。その喜びは俳人にとって詠まずにはいられない。このような小動物に親しみつつその営みを観察していると、初蝶がきらきらする光をまとっているようにも見えるこの句小動物を描きながらも、カメラアングルが後ろに引くように背景となる山野までが浮き立つような光を感じさせた。

セピア色の澤田美喜さんあたたかし 堀口 希望

東京句会の吟行で岩崎邸を訪れた時の句。澤田美喜は三菱財閥の創始者岩崎弥太郎の孫として、東京で生まれた。外交官と結婚し、海外各地で華やかに過ごしたが、ロンドンに滞在した時、「ドクター・バナードス・ホーム」施設を見学して、孤児救済活動に目覚めたという。岩崎邸の一室には、セピア色の家

族写真が飾られていて、その中にはエリザベス・サンダースホーム創立者・澤田美喜の若き日の姿もあった。岩崎邸にいたころは気の強いお嬢様としてなに不自由なくわがままに育つた彼女が、戦後、孤児院を開くまでになった心の動きなど心あたたまる話である。

春の闇つなぎ 回送列車かな 小嶋 洋子

回送列車という素材を俳句に詠み込んだのが面白い俳句にしやすい素材というものは、大方詠みつくされている場合が多いが、俳句に中々詠めそうもないものをもつてくると、何かそこに詩性を生み出し新しさも感じさせる。夜の回送列車は運転席のみあかりが灯っていて、あとは闇を載せた空の列車が繋がっている。

ものの芽に雪が鍛えし力満つ 梶川智恵子

雪に覆われた長い冬の後にやってくる北海道の大地にも木々の芽吹きの時がやってくる。草花が一齐に芽吹き、春は一気にやってくる。そのエネルギーの源はもしかしたら、雪深く覆われたが故に鍛えられた力なのかも知れない。芽吹いてから花が咲くまでの時間は決して余裕があるわけではない。

大試験ペンのせせらぎあるごとし 鮎川富美子

大試験、今でいうと大学のセンター試験であろうか。試験会場は緊張感のある空気が流れる。試験問題のページを繰る音、鉛筆の音が微妙に響く。ひたすら鉛筆で書き綴る記述論文であろうか。その音はせせらぎの音にも似ていた。いずれにせよ静寂の空気が漂う試験会場である。(以下略)